

韓国 ゼミ海外研修

学生氏名	山田 なつめさん
所属学部	都市経営学部 都市経営学科（松浦ゼミ）
参加学年	3年次
滞在期間	2025年9月17日～21日
滞在方法	ホテル

韓国研修報告書

●研修スケジュール

	内容
1日目	移動、ショッピング
2日目	ロッテワールド、懇親会
3日目	烏頭山統一展望台、近現代史博物館
4日目	冒徳宮、宗廟
最終日	帰国



●はじめに

9月17日から21日にかけて、韓国を訪問する研修に参加した。韓国の文化や歴史について理解を深めるとともに、自分にとって初めての海外旅行ということで、国際的な視野を広げることができた。この報告書では、研修の学びや経験を振り返り、自分なりの視点で感じたことをまとめている。

●3日目：烏頭山統一展望台

北朝鮮の風景を見ることができる展望台に向かっている途中でちらほら有刺鉄線のようなものが目に入ってきたため、徐々に近づいているのだと実感がわいてきた。私たちが住む日本はただでさえ島国であるため、国境を感じる機会がほとんどないのでより緊張が高まった。

展望台の中の展示コーナーでは、南北の統一を願う展示や韓国と北朝鮮の比較をする展示などが見られ、広島市にある平和記念資料館と少し似た雰囲気を感じた。

屋外の双眼鏡が設置されているコーナーでは、実際に自分の目で北朝鮮の雰囲気を観察することができ、滅多にすることのできない経験となった。そこで1人の韓国の男性と出会った。言葉はほとんど通じなかったものの、簡単な英語やジェスチャーで「自分は韓国人であること、南北で分断されてしまって悲しい顔」を伝えてくれた。「日本は大丈夫」と考えてしまっていて想像したことがなかったが、ある日突然分断されるということがどれほど残酷かということ、展示を見てそしてこの男性に出会って感じることもできた。展望台から景色の片方を見ればビルが多く立ち並び、もう片方を振り返れば農村地帯が広がり、車もほとんど走っていない状態の対比がとても印象に残っている。

●3日目：韓国近現代史博物館

この博物館は「博物館」と耳にしてイメージするような場所とは少し異なり、展示物が近くにあったり、実際に触れることができたりと当時の生活に入り込んだ感覚であった。所々に日本の影響を感じる展示があった。例えば、右のようなたい焼きなどがあげられる。私の親世代や祖父母世代の人々であれば、より懐かしく感じる資料が多いのではないかと思った。また博物館でもらった資料の中に、「日本帝国強制占有期を経て…」という言葉が書いてあり、韓国人にとってなくてはならない歴史、日本人にとって知っておくべき事実も感じられた。



●4日目：班別研修

班別研修として私たちのチームは、ソウル市内にある中で唯一世界遺産に指定された宮殿「冒徳宮」と朝鮮王朝の歴代王の位牌を安置している「宗廟」を訪問した。目的はバリアフリー・ユニバーサルデザインを発見することだったが、それぞれの建物のデザインを観察すること、歴史を想像しながらメンバーと巡ることが楽しかった。その中での1番の驚きは案内板の一部に点字が使われていることだった。日本に戻り調べ、韓国の点字であるかははっきり分からなかったが、世界中で広まっていることを実感できた。

加えて、チマチョゴリを着用していたため、興味を持った韓国の方が日本語で話しかけてくれたり、韓国以外の観光客の方に話しかけてもらい写真をお願いされたりしたときは国際交流ができて楽しかった。



●街中での発見

地下鉄に乗った時、優先席以外に日本にはない妊婦優先席が存在することに驚いた。優先席は黄色、妊婦優先席はピンク色となっており、混雑時でも空席になっていることが多く韓国に住む人は譲り合いの精神があることを感じた。さらに赤ちゃんを連れた女性が乗ってきた際に、広めの席を譲ってあげる方がいて、日本ではなかなか譲ってあげたい気持ちになっても行動に移すことができない人も多い気がしているので感心した。



●得られたこと

今回の研修は初めての海外旅行で、学びの多い貴重な経験となった。海外旅行をしたいと長い間思っていたため、全てが興奮の連続であった。同時に、この先の人生でさまざまな国を楽しみたいという思いがより強くなった。実際に自分が「外国人」として異なる文化や言語の中で過ごし、これまで日本で当たり前だと思っていたこと、世界共通だと思っていたことが実は当たり前ではないと気づかされる場面があった。また英語ではなくハングル文字ということもあり、行先さえなかなかに読むことが難しかった。このような経験を通して、日本で会う外国人の観光客の方々も同じような苦勞をしていると思った。観光客の方が感じている不安や戸惑いに対して、少しでも手を差し伸べられることがあるのではないかという気持ちが芽生えた。

そして班別研修のテーマをバリアフリー・ユニバーサルデザインにしたことで、海外におけるマイノリティ(目や耳が不自由な人など)に目を向けることはあまりしたことがないと気づき、改めて考える機会となった。日本にいと見落とししがちな視点を持つことで、自分の価値観を広げることができたように感じている。これらの気づきは、今後の卒業論文のテーマや視点にもよい影響を与えるかもしれないと感じた。

異文化に直接触れることで得た学びは、大学内で勉強したり、インターネットで検索したりして得られるものではなく、自分自身の視野を広げる一歩になったと強く感じている。



カンジャンケジャン→

←ロッセワールド

